



TITLE:

武藏野臺地の村落

AUTHOR(S):

櫻木, 静

CITATION:

櫻木, 静. 武藏野臺地の村落. 地球 1934, 21(5): 364-375

ISSUE DATE:

1934-05-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/184292>

RIGHT:

(27) 一九二六 遠藤誠道 撫順炭田産化石植物の研究豫報 地學雜誌 第三八年 第四五二號
(28) 一九二九 Kryshofovich, A. N.: Evolution of the Tertiary Flora in Asia, New Phytologist, Vol. XXVIII, No. 4.

(29) 一九三〇 今野圓藏 信濃中部に産する新世代化石植物群(信濃中部地質誌)

(30) 一九三一 遠藤誠道 新世代の化石植物 岩波講座

(31) 一九三三 森田日子次 山形縣小國産中新世植物中に發見せるターミナリヤに就いて 地質學雜誌 第四〇卷 第四七七號

(32) 一九三一 Johnson, D.: Stream Sculpture on the Atlantic Slope.

(完)

武藏野臺地の村落

櫻井 靜

一、緒言

武藏野は日本に於いて稀に見る廣大な面積を占めた臺地面であつて、殆んど開拓されない平坦面からなつてゐる。この臺地は粘土層・砂・礫等の互層から成つてゐて、その上には厚いロームが被覆してゐるから、井水を得るには容易でなかつた。臺地の北部にある堀兼村の堀兼井は

日本武尊御東征時の傳説に知られたところで、水を得ることの困難は之によつてもその一端を知ることが出来る。臺地の居住は必然水と關係をもつてゐる筈で、聚落の形態に於いても臺地であるといふ特異性が見出されて來る。かゝる意味からこの平坦面から成る武藏野は、臺地聚落の研究に適した所であると言はねばならない

この研究に於いては、武藏野は如何なる形態の聚落を發生せしめたか。又その形態を決定した理由如何。その問題の調査を述べて先學の御指教を賜り度いと思つてゐる。

この研究の範圍である臺地面は、關東山地の山麓にあつて、西部は青梅町を頂點として居り北の限界は加治丘陵・入間川の低地によつて臺地端の川越市に至り、東は荒川低地に接して東京の山の手に及んでゐる。この場合東京市と川越市は對比すべきものであり、臺地端の位置が城下町として發達するに至つた理由である。南の限界は多摩川の流路に及び南東の一部が東京灣に面してゐる。この地形的區分によつたのであるが、都市の研究はこゝでは論外に置いて村落の調査のみとした。五萬分の一地形圖大宮・川越・東京西北部・青梅及び二萬五千分の一地形圖川越・所澤・青梅等數葉を參照せられんことを望む。

二、侵蝕谷の村落

武藏野臺地の村落

臺地面には僅かに侵蝕が行はれた窪と稱する程度のもので、侵蝕が進んで柳瀬川やなせの溪谷の如きものが存してゐる。窪地は臺地村落の鍵とも言ふべきもので、其處には早くから居住が行はれたのである。それは水と極めて關係の深いことを示すもので、窪地があれば泉があり、森を見ることが出來、其處に村落が發生してゐる。この村落を窪地村落と呼ぶことにする。

窪地村落 武藏野臺地には小溪谷の村落が多く、溪谷の地形を明示した村落名が多い。窪・久保・谷・澤等が各地に見られるのである。東京市の大久保・四谷・幡ヶ谷・荻窪・雜司ヶ谷・世田谷・北澤等は何れも地形から生じた聚落名で、居住に對して重要な所であつたといふ事を示してゐる。井ノ頭池・深大寺池・三寶寺池・妙正寺池等は谷頭に位する湧泉で、かゝる場所が先史時代に於いて重要な居住の土地であつたことは、石器・土器等の發見によつて知ることが出来る。鎌倉街道の戀ヶ窪の古い聚落、川越

街道の龜久保・藤久保・淺久保等は窪地の村落
が街村化したもので、その古い發生は全く窪地
に關係してゐたのである。所澤町は舊鎌倉街道
の通ずるところで、弘法の泉と稱するものがあり、この泉の存する西部が聚落發生の核心とな
つてゐて、町の大部は東川の小溪谷中に存して
ゐる。窪地村落の最も顯著な例であると言ふこ
とが出来るのである。その發達のすべてが窪地
の爲でないのは勿論であるが、溪谷に沿つて發
達したことは現在に至るまで比較的井水を吸み
易い低地を求めたことに依存してゐる。昔から
「水のない所澤には嫁にやるな。」と言はれた位
であつたが、現在は動力を用ひて井水を吸み上
げ、共同のタンクを設けて水道式になしてゐる
ことは、特色ある臺地聚落の給水法である。

溪谷の村落 狭山丘陵に源を發して東流する
柳瀬川は、武藏野臺地に於ける最も廣い溪谷を
形成してゐる。所澤町東方に於いては、上安松・
下安松の塊狀村落が見られ、溪谷底の小段丘上

に發達したもの、例で、東方に至るに従つて臺
地が直ちに水田に接することが、臺地端に村落
を發生せしめたのである。竹間澤・城等がその
例で草光氏が注意された如く、この場合には地
形の制約が少いから凝集的散在の形狀を採る。

この二者の中間性のものは坂の下の村落で、地
形からも二者の中間性をなしてゐる。坂の下に
發生した村落が、坂の上に發達したもの、
窪地村落の有する特性を認めることが出来る。

黒目川の溪谷に存する村落も同様の形態を有
してゐて、十戸乃至二十戸位の塊狀村落が分布
してゐるのである。柳瀬川の溪谷に見る如き整
然たる狀をなさないのは溪谷の發達がまだ整つ
てゐないからである。沼袋・畑中の如き小村落
も、溝沼・膝折(朝霞町)の如き大きいものも、
黒目川の溪谷中の小段丘上に位してゐる。濱崎
は臺地端にあつて、急崖によつて水田地に接し
てゐることは柳瀬川の竹間澤に於ける如くであ
る。朝霞町は川越街道の街村として發達したも

ので、黒目川の低地の井水の得易い場所に位してゐる。

この二溪谷を對比して見ると、臺地中に發達した溪谷には塊狀村落が見られ凝集的傾向を示すのである。之は水田耕作によることが大であらうことは、沖積平原の村落に類似してゐる點にある。然し重要な他の理由は廣い窪地の村落で、傾斜面に發達が著しいことが注意される。臺地端の村落も溪谷に接した小窪地に發生したのである。

三、崖下の村落

段丘崖下の村落 武藏野北部には、狹山丘陵の北西にある元狹山村から北東に延長して、川越市の南福原村今福に至る約二〇軒に亘る侵蝕崖が存してゐる。この一線以南には、北の臺地面より一段低い臺地面が續いてゐて、舊多摩川の名殘川とも稱すべき不老川が北東流して、荒川の支流新河岸川に注いでゐる。不老川は水のないことが多く、水のある儘越年することは殆

んどないのでかゝる名を得たもので、武藏野の最も特色ある流をなしてゐる。降雨に際して増水し、雨なくして涸れることは沙漠中の Wady にも比較すべきものであつて、厚いロームの臺地であることがかゝる特色を有するに至つたのである。村落はこの河水には無關係に北方の段丘崖下に接して存してゐる。西部では二本木・上藤澤の村落があり、東部では今福・中新田・塚下・下新田・岸等が一線上に續いてゐる。

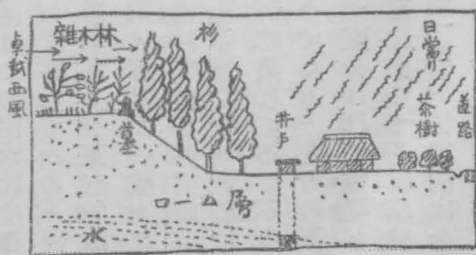
今福は開拓村であるが、崖下に接して線狀をなすことが最も著しい。之を南から遠望すると草葺の家が密集してゐてその背後には美しい杉の森をもつてゐる。北方の臺地は窪の川の小溪谷によつて區分されて中臺と呼ばれ、杉の森はその南斜面にあつて冬季卓越する北西風を防いでゐる(第一圖)。第二圖は今福附近のスケッチで日當りのよい崖下で、井水を得るにも容易な場所となつてゐる。今福の東に岸といふ村落があり、段丘崖の岸にある位置を示したもので、

第一圖



根岸村落と片側村・兩側村

第二圖



根岸村落の今福のスケツチ

日本の各地にある根岸の名を有する村落は崖下に線狀に發達してゐる。今福附近はその標式的ものであるから、かゝる村落を根岸村落と呼びたい。

國分寺西方に續く段丘崖下にも湧水地帯に一

りのよい崖下にあり、風を防ぐこと、日當り、水の得易い要件を具備してゐる。

山麓の村落 狹山丘陵南部の山麓地帯には箱根ヶ崎から東に續いて岸・横田・芋窪・清水等の村落が見られ、現在の村落形態からは區別し

致して村落が發達してゐる線狀の村落である平兵衛新田及び中藤新田は何れも崖下の村落で、開拓する場合に湧水を利用して其處に位置を決定した。この場合も今福と同様に、南向の日當

得ない迄に連續して、帶狀の村落となつた。今福や平兵衛新田よりも一層著るしい崖下にあるので、加治丘陵南麓の村落と共に山麓の村落として區別したのである。狭山丘陵は武藏野臺地の島とも稱すべきもので、地下水層が高くなつてゐる。その結果丘陵地の四周には谷津田となつて細長い水田が喰ひ込んでゐる。

武藏野に於ける居住について考察する時、この地帯が早くから選定されたといふことは首肯し得ることで、聚落形態からも推察し得ると思ふ。この形態を都市の發達と比較する時、裏通りの數を加へて大都市の形態を完成した如く、村落の形態が複雑化して網狀村落となつたのである。そしてその發達は山麓に帶狀をなして土地に密接に結ばれ、水・日當り・防風等にはすべてよい條件を有してゐる。この各村落には養蠶が行はれ、水田が僅かながら耕作され、農閑季には織物が行はれてゐる。農業を本位とする村落であるので、都市的發達は見られないので

ある。

加治丘陵の南麓には、豊岡町から青梅町に至る間に帶狀に村落が分布してゐる。入間川に注ぐ霞川が山麓下を流れてゐて、小谷田・根岸・新久・下谷・貫・上谷・貫・木蓮寺・今井・谷野等の村落が並んでゐる。村落形態は狭山丘陵の南部に於ける如く網狀をなし、丘陵地に極めてよく接してゐる。この山麓の地帯を根通りと呼び品質のよい根通り茶を産出してゐる。

狭山丘陵南麓の帶狀村落及び加治丘陵の帶狀村落は日當り、水、風を防ぐことの條件は今福の場合と同様であるが山地が大きいだけに村落も著るしい發達を遂げたのである。今福の如き一列の村落ではない。狭山丘陵の北側の村落と南側を比較した時、日當りが如何に重要であるか了解されるのである。山沿の位置に個々に發生した村落が次第に發達して結合せられ、山麓の道路によつて結ばれたもので、加治丘陵南麓の根通りは興味あるものである。この帶狀の

村落を根通村落と稱したい(第三圖)。

四、臺地平坦面の村落

片側村・兩側村

武藏野北部には直線狀の村



加治丘陵南麓の根通村落

見られる村落と、第四圖にある上富・中富の如き道路の兩側にあるものとを區別し得るのである。その何れの場合にも樺の大きいものが道路に面してゐて、背後には常緑樹の森がある。北

落が極めて多く、何れも徳川時代初期の開拓によるものである。その形態上の著るしい特色は第一圖に見られる如き道路の北側にのみ

西の氣節風が卓越する冬季に防風林として役立ち、軽いロームの飛散を防止してゐる。樺は雄大な感じを與へる植物で、落葉するから家の南にあつても日當りには餘り妨げでない。その大きい樺のある家程、舊家であることを示すもので、上述の理由から土地に即して生じたものであることが見逃し得ない。

第一圖は川越市南方の福原村附近の地圖で、道路の北側にのみ人家の並んだ片側村がよく發達してゐる。中福・上松原・下松原・上赤坂・下赤坂等は何れも片側村で、崖下の村落として前述した今福も片側村である。かゝる形態を有するに至つた理由は、平坦な臺地面に開拓した村落であることが主であるが、地形と密接な關係にあつて、北部と南部の侵蝕崖に並行した北東―南西の方向を取つてゐる。家屋は南東向で日當りのよい向にあるが、中福では南向の家も相當に多く、道路に斜に向いてゐるものも見受ける。道路の北側の家の所有する耕地が、道路

第四圖



武藏野北部の開拓村……兩側村

の南側にあつて、其處に分家を出してゐるものもあるが、北側の家の日當りを妨害してゐる。北側に片側村を形成したことは更に日當りに關係してゐるので、地形と共に考察せねばならない。三芳村の下富は下富片側と呼ばれ、その特色に

注意した村落名であるので、かゝる形態の村落を片側村と呼ぶことが適當である。

極めて有名である。所澤町の北東にあつて、元

三芳村の三富新田(上富・中富・下富)は開拓村として

祿七年時の川越領主柳澤吉保の開拓に屬し、東西三十三町餘・南北四十七町餘の原野一〇〇〇町歩の廣大な地域を占め、一戸當り五町の宅地・畑・山林を區劃し、中央には六間幅の道路を開いて移住民を招來するなど、實に大掛りなものであつた。現在の短冊形耕地・人家等はすべて當時の土地計畫によるもので、上富・中富の村落は道路の兩側に形成された兩側村となつてゐる。佐藤學士⁽⁸⁾によつて紹介された獨逸の草地村落(Angerdorf)の形態と類似のところもあるが武藏野には全く草地は見られない。草光氏は計畫的建設開拓村落と稱して臺地村落のこの村落を記載し、農業的職業を主とする爲に道路に横向の人家を見、背面を向けてゐるものもある特徴に注意せられた。志木町南方の野火止の村落も全く同様のものである。

次に兩側村と片側村の關係であるが、第一圖の太田村南大塚(兩側村)と大塚新田(片側村)はよくその關係を示してゐる。南大塚の道路の突

き當りに天神社があつて、この位置で大塚新田に結合し、前者が古い開拓村で後者が新しい。福原村の砂久保は兩側村で道路の突當りに稻荷社があり、福原村の他の片側村よりも古く發生してゐる。又、三富新田の場合にも下富片側は、上富・中富に後れて開拓された。その土地の開拓に當つて、自由に開拓の爲し得る草地であつたから、そこに兩側村が形成され、淋しい所であつたことが兩側村となした理由であらう。

原の開拓村落。膝折の附近には、上ノ原・下ノ原・中原・北原・前原等の原のついた小村落があり、調布町附近にも原・中原・西原・三軒家等の小村落がある。所澤町の北方には原・八軒家・大野原・原等があつて不規則な極めて小規模な開拓村がある。そして他に比して新しく最後まで原として取残された所が開拓されたものである。

散村（散在村落） 東京市の北西に當つて散在村落の分布が殊に著るしい。田無町東方の保谷

第五圖



東京市北西の散在村落

多く、青く盛り上つたその様は海洋に散在する島嶼の如くである。この森が防風林として重要であることは、武藏野北部の片側村・両側村の有する美林と同様である。保谷村に近い板橋區大泉町・石神井町は單に東京市に編入されたと

村はその標式的ものであつて、その大部は孤立した一戸からなり、主家・納屋等が屋敷林に圍まれて四周の耕地内に散在してゐる。屋敷林は櫟・樺・杉等が

いふだけであつて、散在村落のよい例である。耕地は全部大根畑で十年前には養蠶を業とする者も多かつたといふが、飛躍的に東京の蔬菜園と變化した。土地所有については一定して居ないが、概して家の周圍に土地を有し、そのあるものは本家と分家が接近してゐて、その周圍に兩家の有する土地が附隨してゐる。小作する人の耕作地も家屋の周圍にあつて餘り離れてゐない。小川博士が越中國西部の莊宅として述べられた孤立莊宅 (Einzelhof) である。下保谷以北では數戸集つて居るが、散在の特色は失はれてゐない。かゝる場合を小塊狀村落と呼んで散村と區別することが可能である。

この散在の原因は、廣い平坦な臺地である爲地形的の制約がないのによるのであらうが、東京に近い位置にあるので早くから開拓されて居住が行はれた爲であらう。計畫的の開拓が行はれなかつた爲に、武藏野北部とはその形態を異にするが、農業を本位とする臺地村落の他の一

つの形と見ることが出来る。平坦面の臺地に於ける居住は、特殊の事情の有せざる限り概して散在に傾くであらう。殊に火災の場合水の乏しいといふ缺點を有してゐるので、散在に導かれたものではなからうか。

街村 片側村・兩側村は武藏野の草地開拓の形態として見られるもので、開拓の當初から片側に兩側に、人家を集合せしめたものであつて片側村が兩側村に變化したものでは決してないこの語は殊更に片側である兩側であるといふ意味が多分に含まれてゐる様に思ふ。かゝる村落を片側街村・兩側街村と呼んで街村の一形態であるかの様に使用するのは如何かと思ふのである。街村の意義は單に街道に沿ふた聚落でありとするならば、線狀の村落の用語と何等變りがない。現在使用されつゝある街村の用語は、交通に極めて關係あるものとして一般に使用されてゐる。直線狀の村落であつても本質的に全く異なるものを、街村といふ語で包括することは當

を得ない。

草光氏が密集的線狀村落として擧げられた調布町は、主要街道に沿ふて人家が密集して道路に面して建てられてゐる。前の農業を本位とする片側村・兩側村に比して商業的職業が認められるのである。この場合注意すべきことは、商家以外の家屋も道路に面して建てられてゐることである。かゝる場合に之を街村と呼びたい。

田無町は青梅街道に沿ふた街村で、五日市街道の砂川は開拓村で兩側村であるが街村化が見られてゐる。膝折(朝霞町)成増・大和田等は川越街道の街村で、低地に發達したのである。膝折に接した野火止は兩側村であつて、全くの街村ではない。地圖によつてのみ論ずるならば、街村と言ふべきものも、野火止の聚落景は明らかに開拓の農村で三富新田の聚落景と類似してゐることは著るしいことである。

五、結 論

以上記述したことを要約すれば次の如くであ

る。

臺地の村落は極めて水に關係があるもので、窪地に居住が行はれた。殊に湧泉がある場合には其處に古い村落の發生を見た。この村落を窪地村落と呼ぶことにする。柳瀬川・溪谷・黒目川・溪谷には、河谷の小段丘上に塊狀村落が見られ窪地村落の特性を有してゐるが水田耕作に關係して塊狀となつたのである。河谷に全く傾斜の見られない下流では、溪谷に接した臺地端に村落が見られ、凝集的散在の形狀となつてゐる。

平坦な臺地が段丘崖と接した部分には、今福の如き崖下に線狀の排列をなした村落が生じ、日當りのよい、水の得易い、風を防ぐ森と段丘崖をもつてゐる好條件に置かれてゐる。かゝる崖下を根岸と呼ぶことが多く、根岸の村名を各地に見るので根岸村落と稱した。狭山丘陵の南麓及び加治丘陵南麓では、山地が大きいだけに村落は帶狀をなした大規模のものである。辻村助教授は既存交通路の存在によつて生じたもの

であることに注意せられたので、根通りと呼ぶこの地帯の名を取つて根通村落と稱したい。これは根岸村落の結合されたもので、經濟的に一つの地帯を構成してゐる。

平坦面には、計畫的開拓の村落が見られ、直線狀の村落が各地に見られる。武藏野南部では用水に關係ある線狀の村落があり、北部には大規模の開拓村落がある。その形態に二つの異なるものがあり、片側村・兩側村をなしてゐる。三富村落の下富片側の名によつて片側村と呼ぶことにした。その何れの場合も農業的職業を主としてゐるので、疏に連續した線狀村落で人家は道路に直面してゐない。その爲に商業的色彩の濃厚な密集的線狀村落が主要街道に直面してゐる形態の街村と區別したい。街村は交通路に依存して發達したもので、單なる線狀村落の稱呼となすことは不當であらうと思はれる。最後に原村落は最も新しく、最後に殘された小草地の開墾による村落である。

東京市北西部には散村が極めて廣い範圍に分布してゐる。小川博士の孤立莊宅に類するもので、次第に北西に開墾された爲に生じたものであらう。點狀のものが分家を出して小塊狀村落となつてゐるのも多い。

參考文獻

- (1) 草光繁 臺地村落の形態 地理學評論 第八卷 三四
九一—三六五
- (2) 東木龍七 地誌學 東京 昭和六年 二九一—二九五
- (3) 綿貫勇彦 聚落地理學 東京 昭和八年 一五五—一六八
- (4) 芦田伊人 武藏野臺地に於ける水と聚落の關係 地球
第五卷
- (5) 山崎順一 武藏野臺地の聚落形態 地理學評論 第九卷
讀圖について 地理教育 第六卷
- (7) 田中啓爾 獨逸の居住形態 地理學評論 第五卷 二四七
- (8) 佐藤弘 人文地理學研究 東京 昭和三年 五三—
- (10) 小川琢治 人文地理學提要 東京 昭和五年 一三八
- (11) 辻村太郎 文化景觀の形態學 地理學評論 第六卷 一
二三四